

Nicholas Tarling,

*Nations and States in South-east Asia.*

Cambridge: Cambridge University Press, 1998,  
x + 136 pp.

かね こ よし き  
金子芳樹

本書は、ニュージーランドにおけるアジア史の第一人者、ニコラス・ターリングによる東南アジア近現代史の概説書である。概説的とはいえ、長年にわたって東南アジアの歴史研究に携わってきた著者の、幅広くかつ奥行きのある知識とバランス感覚に優れた分析力が各所にうかがわれ、同地域の歴史を初めて学ぶ入門者から、さまざまな分野で同地域を扱っている研究者まで、各層それぞれにとって示唆的な本となっている。

全体を通してのテーマは、国家 (state) の概念がもともと多岐・曖昧であった東南アジア地域において、国民国家 (nation state) 主体の世界システムに適合すべく新たな国家の形態がいかに形成されてきたか、という点の解明にある。特に植民地時代から1940、50年代の独立期までを中心に、同地域の国家 (state または political entity) の出現・発生の要因、過程、特徴、影響などを描いている。

本書は3部構成になっており、まず第1部では国別の通史を、(1)植民地以前の「国家」の盛衰、(2)欧米勢力との接触と植民地化、(3)ナショナリズム、(4)独立過程とその特徴、などに注目しながら記述している。あくまで各国史の概説であり、より詳細は国別の専門書などでさらに深める必要はあるが、従来の解釈をバランス良く取り入れ、かつコンパクトに記述されている点で、東南アジアの略史を知るには好適である。

とはいえ、かなり明確な比較の観点も盛り込まれている。特に、東南アジアを島嶼部 (インドネシア、マレーシア、シンガポール、ブルネイ、フィリピン) と大陸部 (ビルマ、ベトナム、タイ) とに大きく分け、前者は欧米の影響が強く、「借り物」の国民国家概念が持ち込まれたのに対して、後者では外部勢力

の介入以前から域内で国家間の接触・対立、統合・分離が繰り返されており、より自律的な政治的統合の概念が形成されていたとする指摘などは傾聴に値する。

第2部は本書の中で最も力点が置かれている部分であるが、ここでは近現代史において国家の出現と関わりの深い問題が取り上げられ、イシュー別の分析がなされている。それらイシューは以下のとおりである。(1)植民地の領域と民族の領域、(2)植民地時代の権威、(3)産業革命の影響、(4)宗主国における議会制の導入とその影響、(5)ナショナリズムの種類と特徴、(6)日本軍侵攻のインパクト、(7)独立獲得の意味、(8)民主主義制度の導入とその多様性、(9)独立達成を促した国際的要因、(10)軍の役割、(11)千年王国運動と共産主義、(12)外交政策の形成過程とその特徴。

第2部の狙いも国家出現の過程を描くことにあるが、ここでは国単位ではなく、地域全体に共通するイシューを軸にしているのが特徴である。イシューごとに西欧の歴史との比較がなされ、東南アジア地域固有の歴史的展開が浮き彫りにされる。また外部世界 (特に西欧) との接触が、各国の内部的要因と融合して国ごとに異なる変化を生み出した点についても比較分析が及んでいる。東南アジア全体の「ASEAN化」が進み、トータルに同地域を把握する意味がいつそう強まっている現在、「国別主義」から離れたイシュー別の記述は、東南アジア理解のひとつの効果的な方法といえよう。

第3部では、欧米における歴史研究の展開とその中での東南アジア研究の傾向を略述した上で、著者は、同地域独特の「国家」の存在を前提とし、さらに近年の国際化の現象を説明できるような東南アジア歴史研究の新たなパラダイムの創造が必要であると主張する。

東南アジア地域では、1997年7月以来の通貨・金融危機とその影響を受けた経済低迷の中で、70年代から90年代半ばにかけて隆盛を誇った「国家」の枠組みが、それを支えた開発体制とともに改革と再編を迫られている。歴史的視点から国家の成り立ちを描いた本書は、概説的ながら、同地域を捉え直すための一助となる一冊といえよう。

(松阪大学政治経済学部助教授)